

犬 尾 城 跡

福岡県八女市大字山内所在遺跡の調査

八女市文化財調査報告書 第46集

1996年

八女市教育委員会

序

犬尾城は、鎌倉時代に築城され、戦国時代末期に落城したと伝えられており、その間、河崎（川崎）城主によって守られて来ました。

それから400年経ちました現在では、市民の憩いの場として親しまれています。

中世山城跡として高い評価を受けております犬尾城について、本市では将来、史跡の指定を行い、指定後の整備も考えた上で、その内容の解明が必要となりました。

そこで、国・県の補助を受け、平成6年度から平成7年度にかけて曲輪跡を中心として、土塁跡、堀跡などの発掘調査を行いました。

この報告書が、犬尾城に対する皆様の理解を深め、今後行われます山城の研究・文化財の保護、及び、生涯学習の生きた教材として、活用されれば幸いです。

なお、犬尾城の発掘調査に際しましては、多数の方々のご指導・ご助言を賜り、また、地元町内会の方々の多大なご協力を受けました。ここに心から深くお礼申し上げます。

今後も文化財の保護と整備に努めていきたいと思っておりますので、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

平成8年3月29日

八女市教育委員会

教育長 小 川 勲

例 言

1. 本書は、平成6年度から平成7年度にかけて実施した福岡県八女市大字山内に所在する中世山城である犬尾城跡の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、八女市教育委員会が行った。事業経費については、八女市が国庫補助を受けた。
3. 遺跡での実測図は、大塚、及び、参加者で作成した。図面の製図、並びに、遺物の実測は、岩戸山歴史資料館において実施した。
4. 現場での遺構写真は、大塚が撮影した。
5. 遺物の整理は、岩戸山歴史資料館において実施した。
6. 本書の執筆は、Vを応用地質株式会社の軽部文雄氏に依頼し、その他を大塚が担当した。
7. 本書の編集は、大塚が担当した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と歴史的環境	2
III. 調査の概要	4
IV. まとめ	15
V. 地下レーダー探査報告	16

I. はじめに

犬尾城跡より、南方約750m、標高差約115m下の高位台地上に東館遺跡がある。キノコ栽培工場建設の事前調査として、平成3年5月より同年9月末までの4ヶ月間、発掘調査が行われた。東館遺跡では、鎌倉時代～戦国時代末期において八女地方を本拠地とした河崎氏の居館跡である事が判明し、遺跡の南側にある山内町には、中世町割の様子が顕著に見られ、整然とした区画整理が城下において行われていた事を、小字が裏付けをしている。

由緒正しき中世城館跡の調査例は県下では少なく、城下町を包括したそれら遺跡の全容解明、とりわけ犬尾城跡の解明に大きな期待が寄せられた。

八女市では、将来の史跡の指定、及び、指定後の整備を考慮した上で、その内容の解明が急務となり、そこで国・福岡県の補助を受け、平成6年度から平成7年度にかけて、二ヶ年事業として、調査を実施する事となった。

平成7年度においては、地下レーダー探査（応用地質株式会社に委託）を行った事を記しておく。

発掘調査の期間

平成6年度 平成6年3月14日～3月29日

平成7年度 平成7年1月29日～3月21日

調査関係者は次のとおりである。

〔平成6年度調査〕

調査主体	八女市教育委員会		
総括	教育長	小川 勲	
庶務	社会教育課長	山口 龍一	
	同補佐兼文化財係長	中村 武紀	
	同係主任	赤崎 敏男	
	同係員	大塚 恵治（調査担当）	
	同嘱託	中川 寿賀子	

〔平成7年度調査〕

調査主体	八女市教育委員会		
総括	教育長	小川 勲	
庶務	生涯学習課長	杉山 信行	
	同補佐兼文化財係長	中村 武紀	
	同係主任	赤崎 敏男	
	同係員	中川 寿賀子	
	同係員	大塚 恵治（調査担当）	

このほか、童男山・犬尾城址保存会の方々や、地元山内町内の方々に多大な援助をいただいた。また、発掘調査、及び、整理において、山村 信栄氏（現太宰府市教育委員会）に助言、及び、資料の提供を受けた。記して感謝の意を表したい。最後に、上記の方々のおちから添えとともに、険しい山中にわけ入り、献身的な作業を行っていただいた作業員各位に感謝いたします。

Ⅱ. 位置と歴史的環境

八女市は、福岡県の南部に位置し、西に筑後市、東に上陽・黒木町、北に広川町、南に立花町と、一市四町と境を接している。

耳納山地と筑肥山地に挟まれ、大分県境の山中に端を発し、市内を東西に流れる矢部川によって、実り豊かな沖積平野が形成されている。

農産物は、米・麦などの他に、電照菊やお茶の栽培も盛んで、特にお茶は「八女茶」というブランド名で、全国にその名を馳せている。

また、伝統工芸も賑わいを見せており、東部においては阿蘇の凝灰岩で作られる石灯籠などがあり、中・南部においては、仏壇や地の利を生かした「筑後手すき和紙」（註.1）の生産が盛んに行われている。

「八女」の名が文献上、歴史の表舞台に登場するのは、今から約1300年前に編纂された日本書紀・景行天皇の条からであるが、市内には、それ以前の遺跡も数多く存在し、その多くは中部、及び、南西部に集中している。アモメ遺跡（註.2）は縄文後期の集落跡として、縄文時代を代表している。弥生時代は、亀ノ甲遺跡（註.3）、六反田遺跡（註.4）、室岡工業団地内遺跡（註.5）、中里遺跡（註.6）、茶ノ木ノ本遺跡（註.7）、などの集落・墳墓群が挙げられる。古墳時代に入ると、深田遺跡（註.8）（4世紀前半の居館跡）などの他に、古墳の出現などもあり、その数は爆発的に増加する。耳納山地の南端部斜面より派生し、市の北東部から西方に延び、末端部は、三潴郡三潴町に到る総延長十数kmにもおよぶ、八女丘陵と呼ばれる中～高位の段丘が存在する。丘陵上には、筑紫君磐井の墳墓に比定されている岩戸山古墳を代表として、石人山古墳（註.10）（筑後市・広川町）、弘化谷古墳（註.11）（広川町）、乗場古墳（註.12）、善蔵塚古墳（八女市・広川町）、丸山塚古墳、鶴見山古墳、童男山古墳（註.13）等が点在し、装飾古墳も数多い。この頃には、三助山、牛焼谷、塚ノ谷（註.14）、中尾谷窯跡（註.15）等の八女古窯跡群も操業を開始しており、各地に須恵器の供給が行われている。

今回、報告を行う犬尾城跡は、筑紫君一族が奥津城としていた八女丘陵の、東端部にあたる福岡県八女市大字山内に所在し、標高約185mの高位段丘上にある。

犬尾城の歴史は、山門郡瀬高荘を管理する為に、徳大寺実定の依頼により現在の鹿児島県にあった大隅国から黒木に移った源助能と、島津忠宗の娘との間に生まれた嫡男、河崎三郎定宗（河崎定善）によって、建久2年（1191年）に築城された、と伝えられる事から始まる。当地は豊後より筑後、肥後に抜ける交通の要衝であった為、周辺には猫尾城（註.16）、高牟礼城、鷹尾城、東館遺跡（註.17）、谷川城などの城館跡が、数多く残されている。それ故、当地域での中世戦国期の激しい攻防が行われていたであろう事は、想像に難くなく、そのような状況の中、天正7年（1579年）に落城（註.18）したと伝えられるまでの388年間、犬尾城は河崎氏代々の拠城として、守られて来たのである。

八女市内における、中世戦国期の調査例は数少なく、ようやくその端緒についたと言える。城下の町並みも含め、今後の調査に期待がかかる。

〈参考文献〉

1. 県指定無形文化財（昭和47年11月18日指定）
2. 「埋蔵文化財調査概報 4」 八女市文化財調査報告書 第29集
3. 「亀ノ甲遺跡」福岡県八女市室岡の弥生遺跡調査概報
福岡県八女市教育委員会（1963年）
4. 「八女市南部地区県営圃場整備事業地内 埋蔵文化財調査概報」
八女市文化財調査報告書 第18集
5. 「室岡工業団地内遺跡Ⅱ」 八女市文化財調査報告書 第31集
6. 同註 4
7. 「埋蔵文化財調査概報 5」 八女市文化財調査報告書 第34集
8. 「埋蔵文化財調査概報 3」 八女市文化財調査報告書 第23集
9. 「岩戸山古墳」環境整備事業に伴う基礎的調査の報告 八女市教育委員会（1972年）
10. 「筑後一條石人山古墳」鏡山・武藤（昭和12年）
史跡名勝天然記念物調査報告書 第12輯
11. 「弘化谷古墳」 広川町文化財調査報告書 第8集
12. 「立山山窯跡群」 八女古窯跡群調査報告Ⅳ・総集篇 八女市教育委員会（1972年）
13. 「童男山古墳」 八女市文化財調査報告書 第16集
14. 「塚ノ谷窯跡群」 八女古窯跡群調査報告Ⅰ （1969年）
15. 「中尾谷窯跡群」 “ Ⅱ （1970年）
16. 「猫尾城址」 黒木町文化財調査報告 第1集
17. 「東館遺跡」 八女市文化財調査報告書 第25集
18. 天正7年の説と天正15年の説がある。

Ⅲ. 調査の概要

犬尾城跡は、現況で土塁、犬走り、空堀、堀切等が遺存している事が見てとれる。

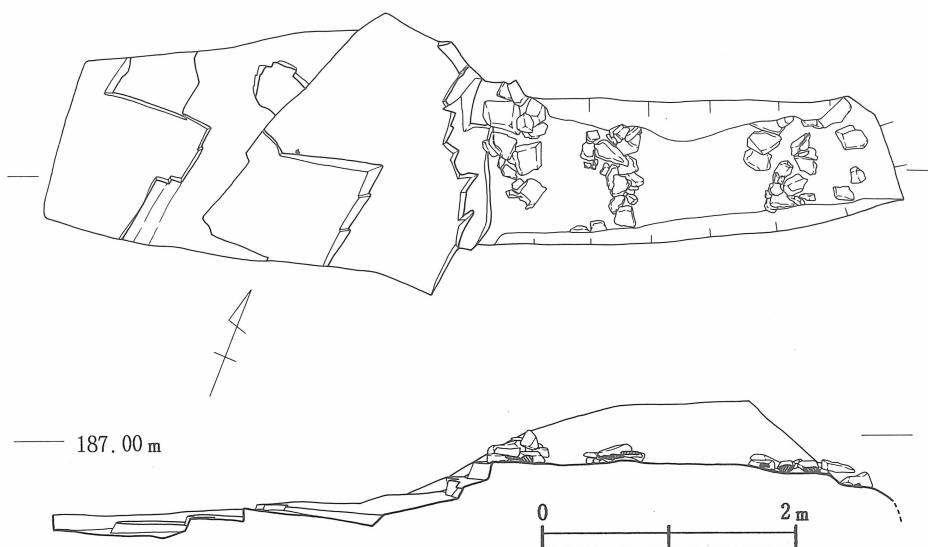
本調査の目的は、史跡の指定、及び、指定後の整備を前提とした遺跡内容の確認である為、全面調査、又は、大規模な調査地区の拡大は、遺跡の破壊につながる恐れがある為に行えず、部分的・限定的調査（トレンチ調査方式）で実施した。平成6年度では、5ヶ所にトレンチを設定し、主に一の曲輪に比定されている台地上の北側部分に調査の主眼を置いた。これは、現況で確認出来る土塁の構築範囲と、その構築方、及び、城普請の際に行われた岩盤削り出し整形の範囲確認を目的とした。平成7年度では、平成6年度の調査結果を基に、地下レーダー探査を実施。既に第5トレンチにおいて検出済であった石列の延長部の確認と、台地内南側平坦面の内容の把握、及び、南東斜面部分において確認されている犬走り、土塁、空堀、堀切の構築方の確認を目的とし、4ヶ所のトレンチを設定。調査を行った。

本報告では、便宜上、台地頂部平坦面をA区、堀切までの南東斜面部をB区とした。以下順を追って説明する。

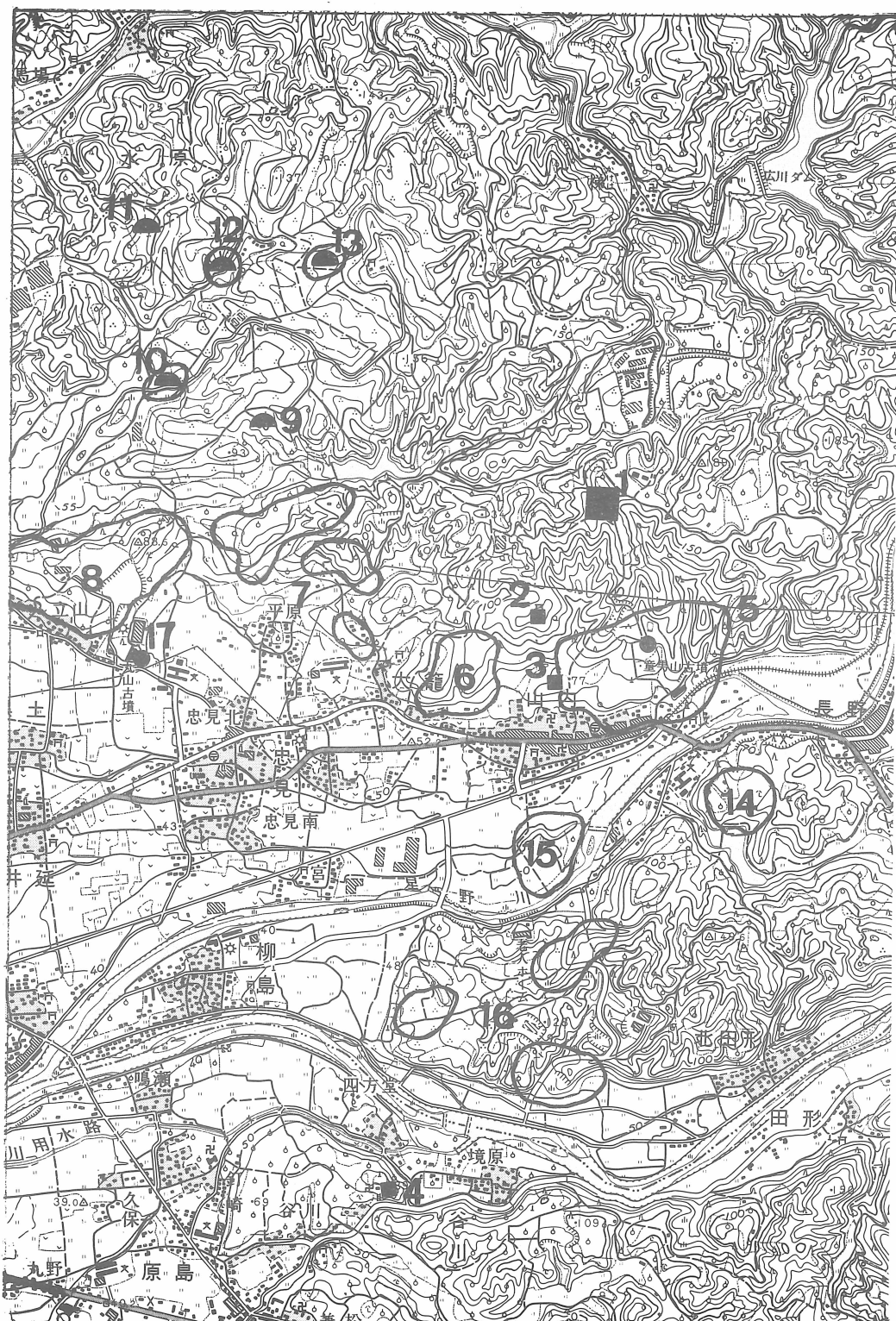
(1) A区調査

第1トレンチ

A区の北東部に、幅1.2mのトレンチを設定した。調査の主眼は、現状で確認の出来る土塁の構築方であった。調査の結果、土塁構築予定区域をあらかじめ設定した後、基盤となっている雲母片岩の岩盤を削り出し、そこに3列の根石列を配置し、白黄色土、暗赤褐色土を盛り上げ土塁を成していた。3列ある根石列のうち、斜面側の1列は岩盤上に乗っておらず、手前2



第1図 第1 トレンチ (S=1/60)



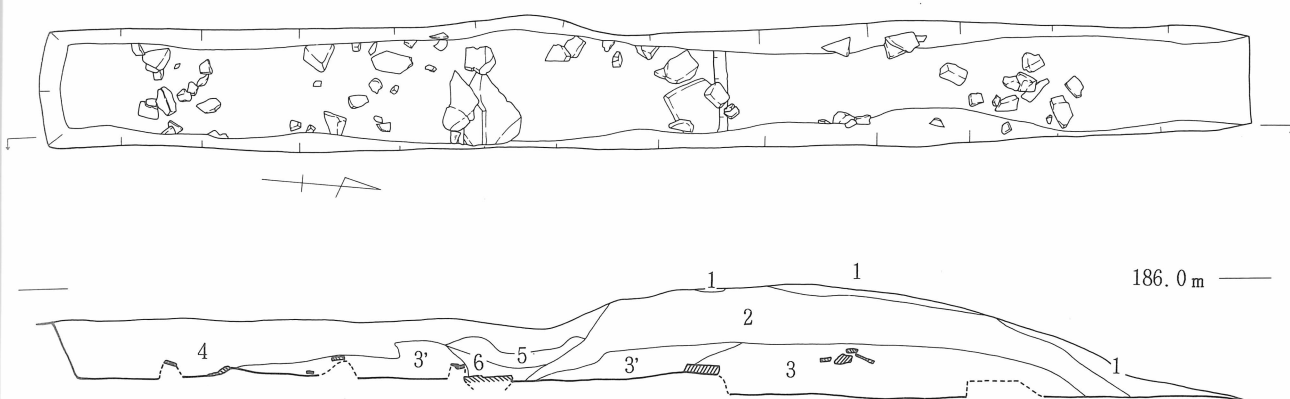
第2図 犬尾城跡周辺図 [1/25,000]

- | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|
| 1. 犬尾城跡 | 6. 日迫山古墳群 | 10. 中尾谷窯跡群 | 14. 綿路塚古墳群 |
| 2. 鷹尾城跡 | 7. 平原古墳群 | 11. 牛焼谷窯跡群 | 15. 榎町遺跡 |
| 3. 東館遺跡 | 8. 立山山古墳群 | 12. 塚の谷窯跡群 | 16. 柳島古墳群 |
| 4. 谷川城跡 | 9. 三助山窯跡 | 13. 菅の谷窯跡群 | 17. 丸山古墳 |
| 5. 童男山古墳群 | | | |

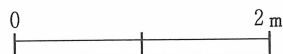
列とレベル差を整地によって整えた後、石材を置いたようである。内側2列に比べ、やや並びは雑である。手前内側の1列目の中心より、斜面側3列目の中心までは、約2.2mを測る。盛土については、タタキ土居的に異なる土を2段に積み上げただけである。しかし、盛土のしまりは比較的悪く、土質はパサパサしている。暗赤褐色土中より、土師器の小皿片が数点出土した。

第2 トレンチ

A区の北端部に、幅1.0m、長さ9.5mのトレンチを設定した。調査の主眼は、第1 トレンチと同じく、土塁構築方の確認であった。調査の結果、地山削平後、盛土の基本形態に変化はないが、他のトレンチで見られるような盛土ではなく、南北方向に長い、ややぼってりとした盛り方を程している。ただ、内側に対しては非常に意識が強く、北側はゆるやかな傾斜をしているが、南側はきつく立ち上がっている。又、土塁内側には、武者走りとも認識出来る落ち込みがある。他トレンチでは見受けられないので、性格づけには若干無理がある。土塁は白黄色土(3層)と暗赤褐色土(2層)を用い、暗赤褐色土は比較的しまっている。土塁基底部は、南北で約4.8mを測る。



1. 暗灰色土
2. 濃赤褐色土(3~7cm程の礫多い)
3. 白黄色土(やや緑気味)→(10~15cmの礫多い)
- 3'. 白黄色土(やや緑気味)→(3~7cm程の礫多い)
4. 暗赤褐色土(1cm以下の砂利礫が多少混じる。粘質性若干)
5. 淡黒灰色土(未完全な腐葉土)
6. 赤褐色土+黄白色土

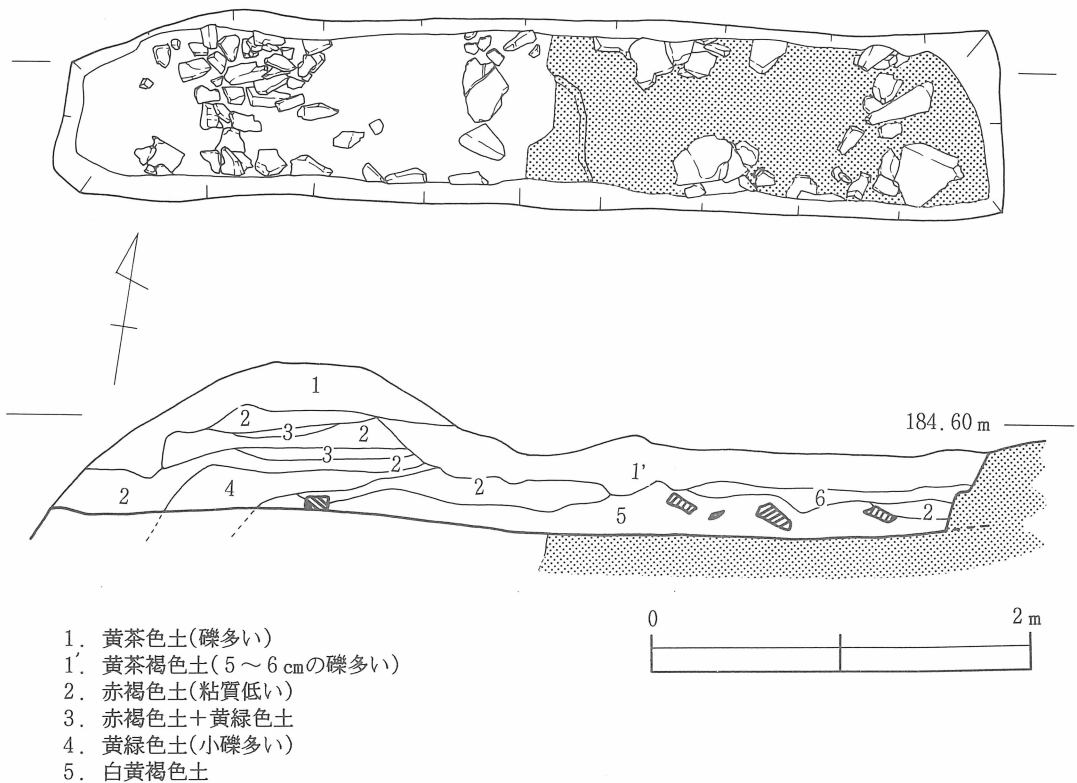


第4図 第2 トレンチ土層断面図 [S=1/60]

第3 トレンチ

A区の北西部に、幅1.0m、長さ5.0mのトレンチを設定した。調査の主眼は、第1、第2 トレンチと同様である。調査の結果、現表土より45cm下で、雲母片岩の岩盤を検出した。岩盤

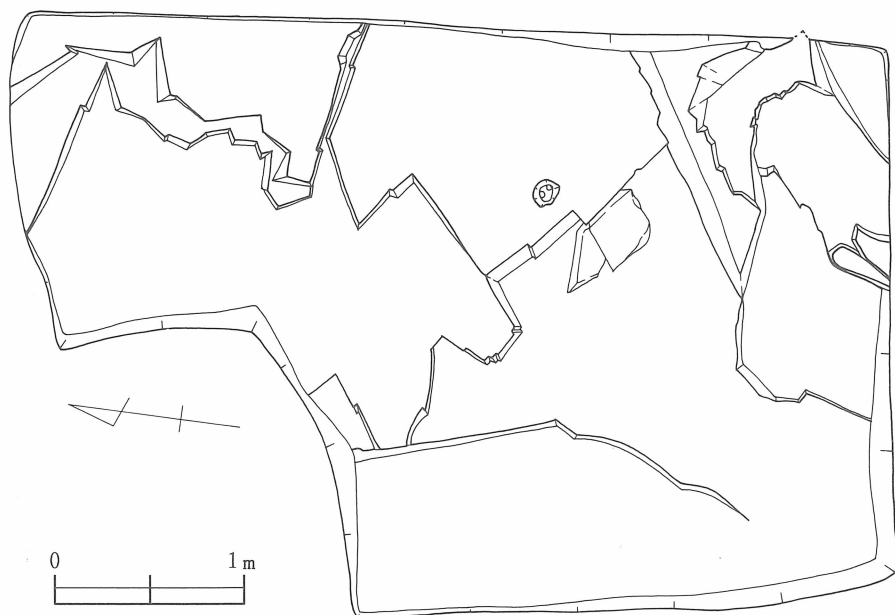
はトレンチ中央付近で、西に向かって落ちている。これは、旧地形をそのまま留めているものと思われる。この落ち込みに対し、白黄褐色土（5層）及び、黄緑色土（4層）で整地した後、土塁を構築している。若干、版築が用いられているようであるが、たたきしめられた形跡は無く、いずれもパサパサした盛土であった。黄茶色土（1層）、及び、黄茶褐色土（1'層）は、土塁補修用の盛土と思われるが、現地表面とのレベル差を考えると、やや疑わしい点が残る。



第5図 第3トレンチ土層断面図〔S=1/40〕

第4 トレンチ

A区北側に、幅3.15 m、長さ4.75 mのL字状のトレンチを設定した。現表土の直下より岩盤が検出された。最もレベル差の無い箇所では1~2 cm程度で、平均でも5~10 cm程しかない。トレンチの中央部付近で、岩盤をのみ状の道具でくり抜いた直径14~15 cmのピットを検出した。周辺に同様のピットの存在が予想されたが、本トレンチは岩盤の規模と方向性の確認に主眼を置いていた為、検出は行わなかった。又、トレンチ内南東部に若干深い落ち込みがある。判然とはしないが、後世のカクランと思われる。



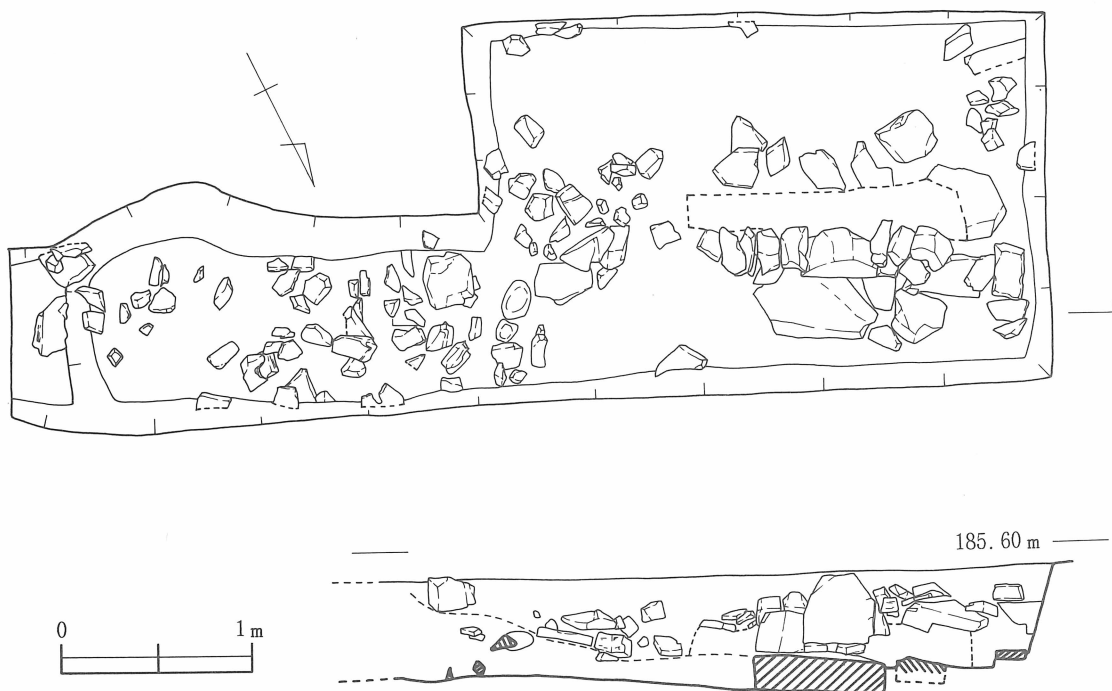
第6図 第4 トレンチ [S=1/40]

第5 トレンチ

A区南側に、幅1.0m、長さ5.5mのトレンチを設定した。現地表面では確認出来なかった土塁の有無の確認が目的であったが、石列を検出した為、急埤南側に1m×3mの拡張を行い、これを①地点とした。又、①地点の西側にも3m×3mのトレンチを設定し、石列の行先を追った。これを②地点とした。①地点においては、土塁と石列についてある程度の把握が行えた。土塁には少なくとも新・旧2つの時期があり、土塁補修（再盛土）を行っていた事が、土層観察よりうかがえる。初期段階での土塁の規模は、現検出面において上面幅1m、下面幅3.2m、高さ0.65mを測る。①・②両地点で検出した石列は、東南～北西方向に主軸をとり、検出総延長は5.1mを測る。構築は非常にシンプルで、基盤上に直接、又は、整地面上に敷石を施し、その直上より石材を積み上げている。①地点では主に横位の積み上げを行い、②地点では縦位の積み上げが目立つ。但し、現況では、2・3段分の石材が確認出来るだけである。①・②両地点を通じ、一段目の石材は標高185.0m～185.10mより積み上げが始まっているが、①地点の東端部では、そのレベルが次第に上がっている。これは、石列が土塁上に乗る形で構築されていた事を示しており、土塁構築後に石列を付設した事がうかがえる。石列の石材配置状況は良好とは言えず、むしろ雑然としていると言わざるを得ない。この石列は石垣的な要素より、

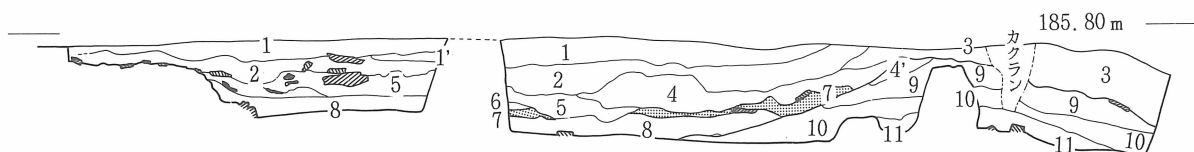
一種の曲輪的な意味を持たせた段差を意図し、設けられた土溜めの石列であった可能性が強い。

②地点西端部において検出した割石の集石については、第7トレンチと重複しているため、この項では割愛したい。



……石垣状遺構基底部

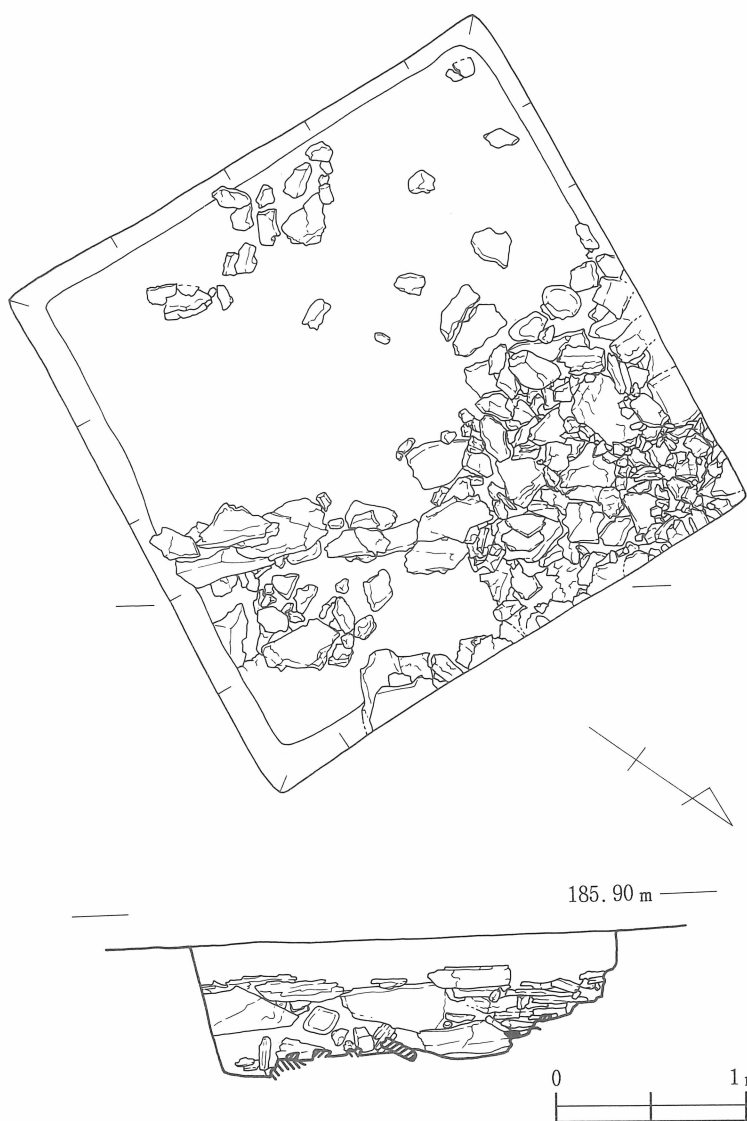
第7図 第5トレンチ① [S = 1/40]



1. 暗茶灰色土(現表土)
2. 暗濃赤褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗赤褐色土+淡黒灰色土 4'. 暗赤褐色土+淡灰色土
 <4. 4' 共に礫が多い>
5. 淡黒灰色土 5'. 灰色土+淡褐色土
6. 赤褐色土(2~3mm程の石英粒等が混じる)
7. 黒灰色土(旧表土)
8. 赤褐色土
9. 黄白色土(割石材多い)
10. 暗褐色土
11. 黄白色土(下部に多量の敷石)

No.8層は石垣構築後の整地層か、石垣護壁層と思われる。

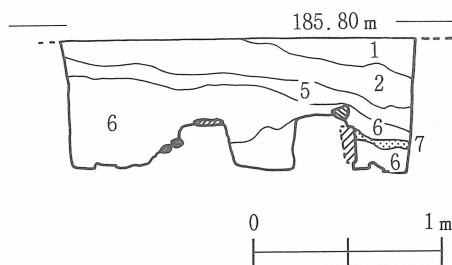
第8図 第5トレンチ①②北辺 土層断面図 [S = 1/60]



第9図 第5トレンチ②〔S=1/40〕

第6 トレンチ

A区南端部に一辺5 mの正方形トレンチを設定した。本トレンチは、発掘調査に先立ち行っていた地下レーダー探査の結果に伴ない、巨石、又は、広範囲に及ぶ集石が存在する可能性が示された為、基盤の検出と共に、その存在の確認に主眼を置いた。調査の結果、巨石の存在は無く、河原石、及び、緑色



第10図 第5トレンチ①西辺
断面土層図〔S=1/40〕

結晶片岩の集石が全面において見られた。又、南・東辺の土層断面の観察から、少なくとも2時期にわたる、整地が行われている事が判明した。5 m四方内においての状況である為、その内容は確定的ではないが、トレンチ内最下層で検出した片岩の集石を第Ⅰ期と仮定したならば、その上面には第Ⅱ期、及び、第Ⅲ期に比定される整地層、及び、各種集石が見られる。A区内において共通している事は、岩盤をその基盤としていない箇所においては、まず10~15cm程に割った片岩系の石材を比較的雑に敷きつめておき、その直上に構築物を上げるようである。トレンチ北東部において検出された河原石の集石は、備蓄用石材、又は、投石用石材としての用途が考えられるが、北西部で検出した石囲い状石列と共に、その性格は不明確である。



第11図 第6 トレンチ [1/40]

第7 トレンチ

A区南側中央に、幅1.5m、長さ24.3mの細長いトレンチ設定した。本トレンチは、第5トレンチと重複しており、それより延びていた石列の再確認、及び、A区全体にかかる岩盤の規模等の把握に主眼を置いた。又、石列延長部の確認の為、本トレンチ南西部に3m四方形の拡張部を設定した。調査の結果、基礎となる岩盤は、拡張部周辺でそのレベルを下げながら、下にもぐり込んで行く。その直上には、土塁、石列、礎石等の構築物があるが、これらは同一時期の所産のものではなく、少なくとも、2時期にまたがって、構築されたものである。第1の時期は、土塁が積み上げられた時期である。土塁は、A区内トレンチで検出した状況と大差はないが、根石を積み並べた後、土塁の核となる暗灰色礫層を厚目に盛っている。その後、暗赤褐色粘質土で表面を固め、やや褐色を帯びた暗茶灰色土で覆土し、土塁を形成している。意識して、強固に構築された感がある。又、その折に土塁に直行する形で、軸を東南東に持った礎石と思われるものが3個確認出来た。これらは暗茶灰色土の直上にあり、土塁構築時と期を同一にする。第2の時期は、石列が構築された時期である。第1の時期にあたる遺構は、黄茶黄橙色土によって覆われ、その直上に暗緑灰色土によって整地が行われ、石列が構築されている。石列は、土塁根石から南東約1mの所で止まっており、そこから土塁端部までは片岩の割石を暗緑灰色土中、又は、直上に比較的無造作に積み上げられた積石によって接続している。この積石の直上には、礎石的要素を持った30~40cm程の偏平な石材が横位に置かれてある。建造物の構築があったのなら、まさに基壇と呼べるものであろう。現在のところ、石列と基壇状積石は同一期の所産である可能性が強いが、岩盤の削られ方等の在り方から、注意を要する必要がある。基礎となる岩盤は、北から南に向けて、徐々にそのレベルを下げながら、石列直下周辺において構築物の下になり、その姿を消す。その岩盤には幾つかの細工がほどこされており、検出した石列から、北側に2.6mの地点より、ほぼ北向きに延びる東西方向の落ちが存在する。第1トレンチにおいて確認した、岩盤削り出しと同じ状況を呈しており、本来はこの直上に、土塁が構築されていたのであろう。又、その落ち込みの上面部分、及び、トレンチ北端より南に2.6m程の所に、岩盤をくり抜いた柱穴を検出した。今回も、その柱穴の全容を把握しきれなかったが、A区内に建物が存在していた事は、疑いの余地はない。

第8 トレンチ

B区北側に、犬走り、土塁、空堀を直行する形で、幅1.3mのトレンチを設定した。便宜上、B区上段の土塁を土塁a、下段の土塁を土塁bとし、b土塁西側の空堀を堀a、東側の空堀を堀bとした。調査の結果、A区より続く岩盤を削平し、土塁a・bには盛土を施している。犬走りには、淡黄赤褐色で整地し、その直上に根石、又、それに伴う小礫群で土塁a裾部を固めた後に、段階的に斜角を持つ割石をはめ込みながら濃赤色土を盛り上げ、その上に茶灰色土(パサパサ)を盛る。土塁bは、堀a部の岩盤を掘削した折に、同時に削り出した岩盤の直上



第12図 第7トレンチ [1/60]

に濃赤色土等で盛土を施している。堀bの東側にあるわずかな高まりは、根石が存在していた事から、盛土を施した低い土塁であったと思われる。現在、40cm程の高まりとして遺存しているにすぎず、往時の姿は判然としない。第8トレンチでは、最約的に3つの土塁、2つの空堀、そして、犬走りの構造が把握出来た。

第9トレンチ

B区南側に露頭していた岩盤を検出する為に、トレンチを設定した。露頭した岩盤は、犬走りと土塁aの延長線上にあり、両者との深い関りあいと考えられた。調査の結果、A区より下方に延びている岩盤が、犬走り部分で深く削られ、削り出された東側の岩盤は、土塁aの一部として、盛土を施こされていた。又、削られた犬走り部分には、大小の片岩石材を荒く設置している。大半の石材は横位にあるが、トレンチ内北端で検出した大型の石材のみ、縦位にあった。ここが、出入口として認識されていたならば、小口として設けられた犬走り入口の段差として、とらえる事も可能と思われる。

Ⅳ. ま と め

犬尾城は、別名・河崎城、犬尾篠山城、生駒城などと呼ばれ、その始まりは、黒木氏の祖・源助能（黒木助能）と島津忠宗の娘との間の嫡男・河崎三郎定宗（河崎定善）が、建久2年（1191年）に築城したと伝えられている。しかし、築城当時の様子や位置についての資料は皆無に等しく、現在ではそれを伺い知る事は出来ない。初期犬尾城が建久年間に存在していたならば、それは平安時代末期から鎌倉時代初期にあたり、実年代としては12世紀末頃となるが、現時点では15世紀代より遡る資料は出土しておらず、その伝承を証明する積極的な根拠は見つからない。

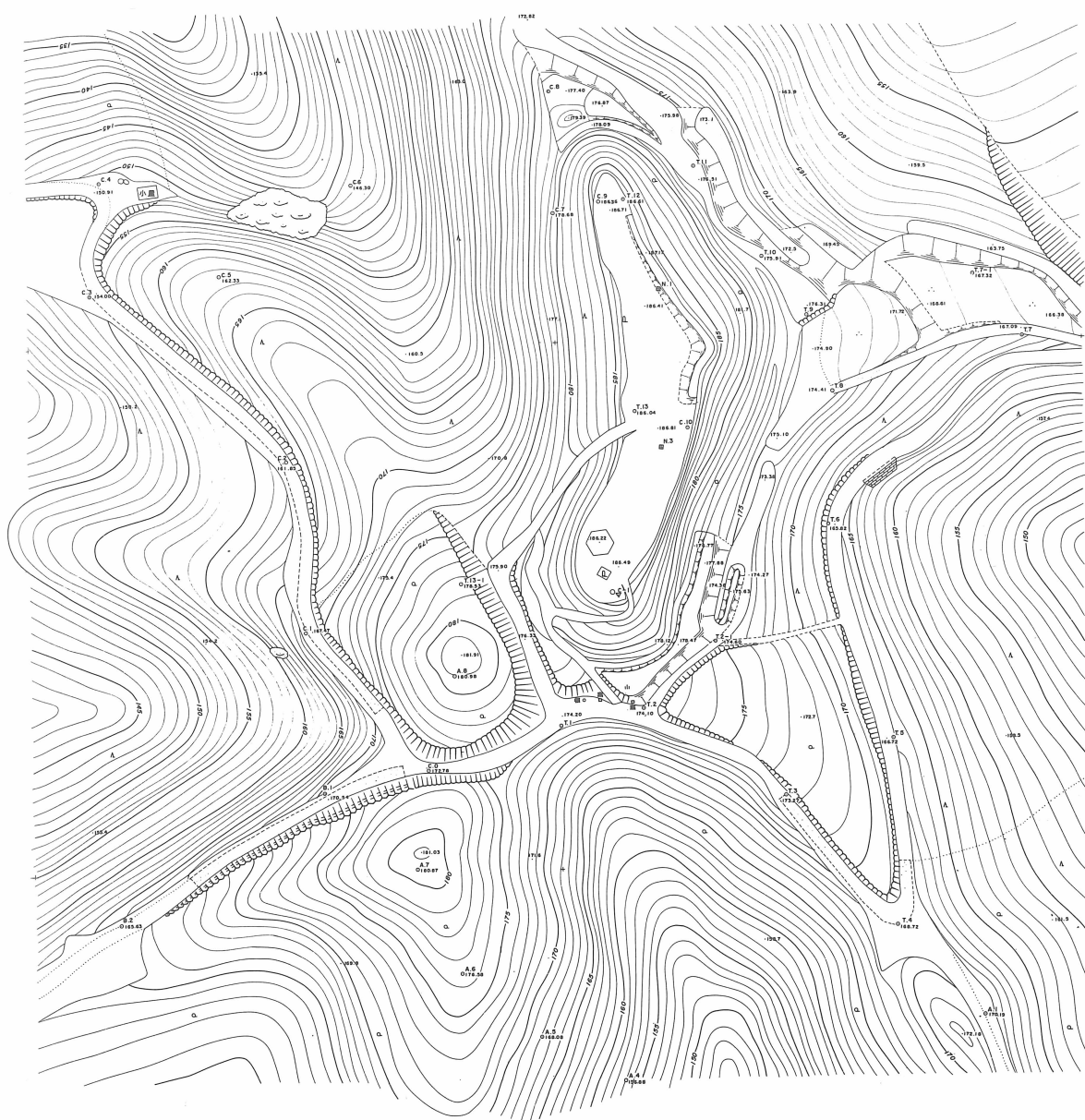
但し、第7トレンチで検出した土壘を覆う暗赤褐色粘質土中より出土した土師器・羽釜胴部破片が15世紀代に比定されるならば、第7トレンチの第Ⅰの時期は、第6トレンチの第Ⅱ期に相当する可能性が強いので、第6トレンチの第Ⅰ期は14世紀以前ともとらえられる為、明確な否定も出来ないのが現状である。

では、初期犬尾城の存在を仮定すると、その位置はどこであろうか。

鎌倉時代初期。政状としては安定していた当時期に、籠城の為の山城を早急に築城する必要性は、さほど強くは感じられない。実際には、筑後国的一端を担い、自らの領地（荘）を把握する為に城館（常居館）を建て、館周辺に防衛ラインを設定する事の方が、容易に想定出来るし、又、現実的でもある。河崎氏の本拠は、現在の行政区分で言う、現八女市大字山内・忠見周辺がその比定地とされている。山内町内では、現在も城下としての当時の町割りの姿が鮮明に残っている。この城下の程近くに、現在、東館と西館の地名があり、その1つ東館は、平成3年に東館遺跡として調査が行われ、14世紀以降の城館跡として確認されている。もう一方の西館においては現在未調査である。ここに14世紀以前の城館が存在する事は否定し得ない。初期犬尾城に推定される場所は、城下が望める山麓部に存在する可能性もある。以降、戦国期に到る時代の流れの中で、次第に山城の存在が必要となり、山中における縄張りが行われたものと思われる。

さて、次にその縄張りについてであるが、今回調査したA・B区とは別に、A区台地の南西側に、堀切を挟んで2つの小山があり、又、B区の南東側にも堀切を挟んで2つの小山が存在する。その小山の内、南東端にある小山の南西斜面には、帯曲輪とおぼしき小道が斜面沿い北西に延びている。又、A区台地の北西斜面上にも同様の小道が在り、それを補強する為のものと思われる石積みも、今回の調査中に行った現地周辺踏査で明らかとなった。

これまでの調査結果を踏まえても、山城と居館の関係、全体の縄張り、その上下限、などについては、依然として多くの問題を抱えたままである。今後は、現地踏査を主眼に置いた全体像の把握に努めながら、今後の精力的な調査に期待が寄せられるところである。



犬尾城跡地形測量

V. 地下レーダー探査報告

はじめに

本冊子は、福岡県八女市教育委員会の御依頼により、応用地質株式会社が実施した、「犬尾城跡地下レーダー探査業務」の結果を取りまとめたものである。

調査の概要は以下のとおりである。

調査の概要

- (1) 調査件名 犬尾城跡地下レーダー探査業務
- (2) 調査地 福岡県八女市大字山内字城ノ西 犬尾城地内
- (3) 調査期間 1995年12月5日～1996年1月25日
- (4) 調査内容 電磁波反射法探査
総測線長 383 m
- (5) 調査の目的

犬尾城跡は、福岡県八女市にある中世の山城跡である。先頃の発掘調査によって、本丸とみられる曲輪から石列や土塁の跡が出土確認されているが、現在のところ、遺跡の全容はまだ明らかになっていない。

本調査の目的は、犬尾城の本丸跡とみられる曲輪面と斜面に地下レーダー探査を実施し、地下浅部の地盤状況を調べることによって、曲輪内の段差や石垣をはじめ、空堀や井戸跡など、各種城郭遺構の有無と埋蔵分布状況を推定することである。

- (6) 調査担当 軽部文雄（応用地質株式会社 探査工学研究所）
和久野正人、吉田真治（同 九州支社）

探査結果

曲輪面上での地下レーダーの記録は、深さ約数十cm～1 mまでの大局的な地盤状況を反映しているものとみられ、ほぼ良好な記録が得られたといえることができる。ただし、急な斜面での測定記録は凹凸や草木の影響などもあり、必ずしも鮮明ではなかった。レーダーの各測線における反射像には、場所によって顕著な変化が見られることから、これに基づいて地盤状況の変化や遺構の推定を行なった。

なお、本調査地における電磁波伝播速度は、ワイドアングル測定の結果、約6.9cm/nsであった。この値を用いて、記録の時間軸（縦軸）方向の長さを深度に換算し、各記録に深度スケールを貼付した。

探査結果の要旨は、以下のとおりである。

1) 遺構面もしくは地山（岩盤）面付近からの反射像

主測線 1・2・3・4 の測定記録をみると、いずれも N-3 杭付近（7 測線付近）ないしはその前後数 m あたりを境にして、南北に細長い本丸曲輪の南側と北側とでは反射像の様相が著しく異なっている。N-3 杭付近（測線 7 のあたり）より北側の曲輪面では、ほとんどごく浅い表層直下付近からの反射が得られているのに対して、南側の曲輪面では深さ数十 cm 前後のところに、多くの石の存在や地盤の乱れを示唆するやや複雑な反射像が明瞭に検出された。

このうち北側の曲輪では、八女市教育委員会によるトレンチ発掘調査の結果、すでに岩盤が地表付近にまできていることが確認されており、地下レーダーの記録にみられる浅いところからの反射像の連続は、この岩盤面からの反射と判断してほぼ間違いない。

これに対して曲輪南側の測定記録は、地山の岩盤を覆っている覆土が相対的に厚いことを物語っており、さらに城郭遺構面付近の土質変化や攪乱に起因すると思われる反射面の形状から、全体としては南側曲輪面の中央部が緩くくぼんでいて浅皿状になっている様子がうかがえる。現地表面の形状からも縁辺部が土塁状の造りになっていて曲輪の周縁を取り囲んでいたことが想定され、レーダーの記録はこのことをほぼ裏付けるような結果となっている。

上記のように、互いに地盤状況の異なる曲輪の南側と北側は、N-3 杭または、7 測線付近を境として変化している。7 測線以南の測定記録はいずれも深さ数十 cm 前後の深さまで反射像が得られているほか、1 測線および 2 測線の、いずれも距離 0～2 m 付近に北から南側へ傾斜状の反射が明瞭に検出されており、このあたりに本丸曲輪を基本的に区切る段差、あるいは緩い斜面があるものと推定される。

2) 曲輪北側の地盤形状と推定遺構

N-3 杭より北側では、極端な起伏の存在は認められず、ほぼ浅く安定的な地盤（岩盤）が基本的には連続しているものと推定される。ただし、ここでも土塁のある縁辺部は相対的に高まりをみせており、さらに、10 測線の記録などからも明らかなように、土塁内部や土塁の根元付近に石を思わせる反射体の反応が検出されている。

土塁より内側の曲輪面では、三箇所凹みと読み取れる異常反射が検出されている。このうち、2 測線の 24 m～26 m 間にみられるくぼみ状反射像については、ちょうど現在の祠の正面に位置していることから、その性格が注目される。他方、これら三つのくぼみ・凹みは、西側縁辺の土塁の裾に沿って分布しており、ひとつつながりになって一本の溝や道であることも考えられる。この推定を裏付けるものとして、調査区北端付近でのトレンチ発掘調査の結果、やはり縁辺土塁の裾あたりに溝状遺構の断面とみられる凹みが検出されている。一連のくぼみ状反射像が独立しているのか、それとも連続して溝もしくは道となっているのか、今後の調査における一つの課題とされることが望まれる。

1・3・4 測線のそれぞれ距離 10～25 m の間には、小さな穴とみられる下方向に尾をひく反

射像が幾つか認められた。このあたりは、ちょうど南北に細長い曲輪の屈曲するところで、近くにトレンチ№4が発掘されている。同トレンチでは、径約10～20cmほどの柱穴（ピット）が一つ見つかっており、上記の反射像がこの柱穴と同じ建物の別の柱穴である可能性も考えられる。

4 測線の36 m～46 mの間付近では、ごく浅いところに、強い反射体の群れが連続して検出された。これらは岩盤の上面そのものからの反射が強くでたものと考えられる。

曲輪北側の二つの領域に、周囲と異なる土質状況を示唆する反射がみられた。いずれもごく浅いところで、電磁波があまり深く入っていかない様子のみられるのが特徴であり、遺構とは直接関係がない可能性の方が高い。

3) 曲輪南側の推定遺構

上記1)、2)において既に述べたように、曲輪南側でも土塁のある縁辺部は相対的に高まりをみせており、5・6・3・4・11の各測線の記録からも、土塁内部や土塁の根元付近に石を思わせる反射体の反応が検出されている。また、全体として南側曲輪面の中央部が数十cmの深さに緩く凹んでいて浅皿状・浅碗状になっている様子をうかがうことができ、城郭の遺構面もほぼこれに対応するものと考えられる。

南側曲輪面の中央付近では、1・2・3・4・5・6の各測線とも、多くの石の埋蔵を示唆する反射体や、強い反射面、覆土地盤の攪乱を思わせる乱れた反射像等が鮮明に認められた。

まず、1 測線の10～6 mの相対的な浅みに強い反射体の群れが検出され、石の密集している状況が推定された。この位置では、トレンチ発掘調査の結果、基壇状遺構とみられる石積みの集積が確認されており（トレンチ№5）、レーダーの記録はさらにその広がりを捕捉したものと考えられる。

2 測線の7～10 m、3 測線の9～12 mの各区間に強い反射像があり、石や硬い面の存在を示唆している。これも同トレンチ発掘調査結果（トレンチ№5）と照合すると、石列跡とみられる遺構にほぼ合致しており、これらの石の存在を捉えたものと考えられる。

いっぽう、トレンチのさらに南側の未発掘域においても、1・2・5の各測線の記録から、石と思われる多くの反射体や強い反射面が検出された。反射体は、前述の石列が崩壊した際に散らばった石か、もしくは、何らかの建造物の基礎である可能性が想定される。また、記録では、このあたりの地盤（岩盤）や遺構面は、全体の中ではもっとも低く深いということが推定されるが、複雑な凹凸の存在もうかがわせており、城郭遺構の構造を調べる上でも極めて興味深いところといえることができる。

トレンチ（トレンチ№5）の北側でも、3・4 測線の6～0 mの区間付近の浅いところに石などの反射がみられることから、基壇状遺構や石列との関連性、さらに曲輪北側への通路遺構の可能性を含めて、今後の調査対象・検討課題とされることが望ましい。

4) 斜面での測定記録

斜面での測定は、おもに犬走りやテラス状遺構の有無を探るために、11～14の測線で実施したが、斜面がかなり急であったことや、凹凸や草木の影響などもあり、遺構の有無についての推定をするには不十分であった。ただし、いずれの測線においても、斜面の中腹あたりにやや強い反射像が認められるため、ごく細い犬走り状のテラスがあったという可能性を全く否定することはできない。しかしながら、現地斜面がかなりの急傾斜であることや、ほかに犬走り状遺構の存在を示唆するような情報は得られていないことなどから、その可能性は低いと思われる。



測線配置図



図版1 第1トレンチ（西より）



図版2 第3トレンチ（南より）



図版3 第4トレンチ（北より）



図版4 第5トレンチ①（北東より）



図版5 第5トレンチ②（北より）



図版6 第6トレンチ（西より）



図版7 第6トレンチ（北より）



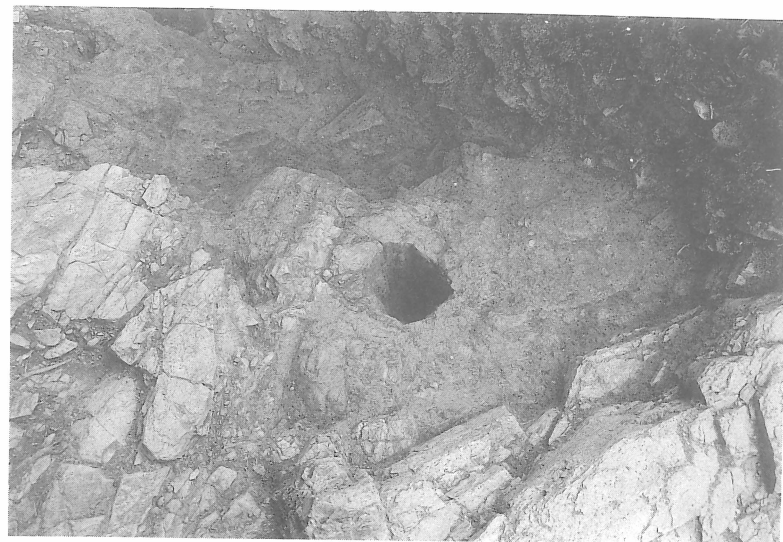
図版8 第7トレンチ（南より）



図版9 第7トレンチ・土塁跡断面（北より）



図版10 第7トレンチ（東より）



図版11 第7トレンチ・柱穴跡



図版12 第8トレンチ（南西より）



図版13 第9トレンチ（南より）



図版14 地下レーダー探査状況



図版15 地下レーダー探査状況

報告書抄録

ふりがな		いぬおじょうあと						
書名		犬尾城跡						
副書名		福岡県八女市大字山内所在山城跡の調査報告						
巻次		第1分冊						
シリーズ名		八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第46集						
編著者名		大塚恵治						
編集機関		八女市教育委員会						
所在地		834 福岡県八女市大字本町647 TEL 0943 - 23 - 1111						
発行年月日		西暦 1996年3月29日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
いぬおじょうあと 犬尾城跡	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 おおあざやまうち 大字山内	402109		331339	1303647	19960129～ 19960329	200 m ²	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
犬尾城跡	山城	中世 戦国時代	土塁、石列、柱穴 犬走り、空堀、堀切		土師器皿、土師器羽釜 青磁、鉄片、河原石集石		岩盤削平後の曲輪の 形成 河原石集積、礎石跡 の検出	

犬 尾 城 跡
八女市文化財調査報告書

第 46 集

発 行 八 女 市 教 育 委 員 会
八女市大字本町 6 4 7
印 刷 (資) 東 兄 弟 印 刷 所
八女市大字祈禱院 5 6 2